

貴重書紹介

『源氏物あらそひ』

平田 さくら^É

応永20年(1413)

亀若丸書写。卷子本。1軸。

毛利家旧蔵本。著者未詳。

黒色表紙、15.0 × 19.0cm。

題箋「源氏物あらそひ」

7.1 × 1.8cm、表紙左肩に貼付、

本文とは別筆。内題欠。

本文部分7枚継ぎ

(天地14.8cm、紙幅44.4cmから
46.4cmの料紙を書写後に継紙)。

1行13から14文字。

本文全長336cm。

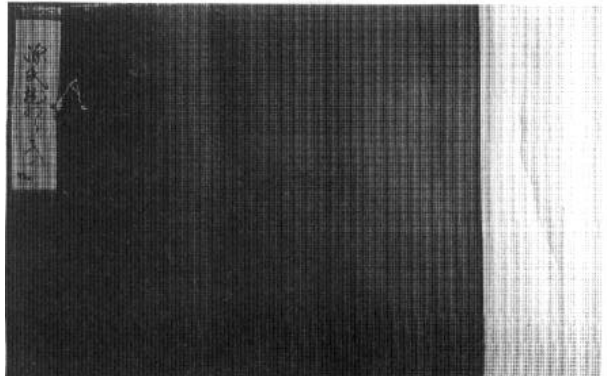
奥書「于時応永廿年七月一日書之 亀若丸」。印記なし。

裏打ち補修あり。

軸、黒色プラスチック状。紐、平織り、茶色。

桐製蓋付茶色塗箱に収納。

明治大学図書館請求記号、091.4/52//H。



^Éひらた・さくら / 図書館整理課

1. はじめに

『源氏物あらそひ』は、『源氏物語』の登場人物の行動や心理に着目した批評書である。単一の人物や場面を取り上げて批評するのではなく、2つの類似する事柄を取り上げて比較し、その優劣をあらそわせ、判定結果を歌で示す、というものである。書名は「優劣をあらそったこと」にちなんで付けられたという¹⁾。このような鑑賞のあり方は、先行する『無名草子』の影響を受けたものと言われる。

著者は未詳である。成立は鎌倉時代後期から室町時代初期にかけてと推定される。平安時代中期に成立した『源氏物語』を、中世の読者がどのように鑑賞し、享受したかを示す資料と位置付けられている。応永20(1413)年という奥書をもち、南北朝統一後の室町4代將軍・足利義持時代の写本である。その存在は、『国書総目録』によって明治大学図書館の所蔵一本のみが知られる。すでに翻刻や複製も行われている。

本稿では、改めて所蔵館の立場から詳細な書誌的事項、来歴を紹介し、内容紹介、類書(『源氏人々の心くらべ』)との比較、『源氏物語』研究史上の意義に触れることとする(『日本古典文学大辞典』²⁾と、複製本『復元版源氏物あらそひ』¹⁾別冊収載の山岸徳平氏の解説に負うところが多い)。

2. 内容紹介

『源氏物語』の批評方法

『源氏物あらそひ』の本文は17条からなる。第1条では次のような比較を通じて、『源氏物語』を批評あるいは鑑賞している(本文の引用は全て市古貞次氏の翻刻³⁾に依拠する)。

きりつばのかうゐ^ハいまたとてまかで給ひしをゆるしがた^く□□^お
ぼしめ^ましたりし御門^{みかど}の秋の御こゝろと、むらさきの上のうせた
まひし源氏の御なげきと、いづれ猶ふかし。

『源氏物語』から、「桐壺の更衣と死別した帝」と「紫の上と死別した源氏」を取り上げている。その2つの事跡を「いずれの嘆きが深いか」という点で優劣をあらそわせている。下される判定は、

つきもせぬ心のやみの深夜に雲がくれにし秋ぞかなしき

桐壺の更衣が秋に雲がくれした方が悲しいといって、桐壺帝の嘆きの深さが優っている判定したわけだ。

このような形式で、問答が17回行われる。取り上げられる順番は『源氏物語』の巻の順序に関係なく、同じ人物が状況を違えて登場することもある。著者の好み、ひいては当時の『源氏物語』読者の好みを反映しているとの推定も成り立つ。

以下に全17条の要旨と判定を示す。

- ㊦ 桐壺の更衣と死別した帝と、紫の上と死別した源氏の嘆きの深さの比較（桐壺帝）
- ㊦ それかとぞみるしら露のと詠んだ夕顔と、猫に御簾を引き開けられて柏木に姿を見られた女三宮との端近さとの比較（夕顔）
- ㊦ 源氏と頭中将と、薫と匂宮の仲のよさの比較（源氏と頭中将）
- ㊦ 源氏と、薫の美しさの比較（薫）
- ㊦ 柏木の文を女三宮の敷物の下より見つけた源氏の心中と、匂宮と浮舟の関係を初めて耳にした薫の心中とのおろかさの比較（源氏）
- ㊦ 夕顔死後の源氏と、浮舟死後の匂宮との悲しみの深さの比較（源氏）
- ㊦ 伊勢に下向する六条の御息所のせつなさ、源氏の須磨への退去に際する花散里の悲しさの比較（六条の御息所）
- ㊦ 鬚黒の大將に火取りの灰を北の方が嫉妬してかけた事と、六条の御息所が嫉妬して葵の上への物の怪に出たことの心苦しみの比較（鬚黒）
- ㊦ あさがおの宮と、宇治の大君の心深さの比較（大君）
- ㊦ 女三宮と柏木の関係と、浮舟と匂宮の関係の軽率さの比較（女三宮）
- ㊦ 六条の御息所への追慕から秋好中宮をとりたてる源氏の心と、夕顔への追慕から玉かづらをとりたてる源氏の心の比較（秋好中宮）
- ㊦ 夕顔の素性を知らない時分の源氏の心中と、朧月夜を身分の高い方とは承知しながらも素性がわからないまま別れたことのおぼつかなさの比較（朧月夜）
- ㊦ 頭中将が源氏を須磨まで訪ねたことと、薫が八の宮に後見を託された姫君を大切に世話をすることのありがたさの比較（頭中将）
- ㊦ 南殿の桜の宴と、六条院の女樂との面白さの比較（女樂）

- ☞ 惟光が紫の上との結婚を察してねのこはいくつと申したことで、薫の隨身が手紙の使者から浮舟への文が匂宮からのものだと探り出したことの察しのよさの比較（惟光）
- ☞ 源氏が藤壺との密会のことを声に出して詠んだことで、柏木を酔ったふりをしてむやみに責める心とのはしたなさの比較（柏木）
- ☞ 六条院に女三宮が移った頃、猶のこれる雪と口ずさんで源氏が紫の上の所に渡ってきて、紫の上が涙を隠して心から打ち解けてもてなした春の心苦しさと、匂宮が夕霧の六の君と結婚した夜、涙が乾く間もない中の君の秋の夜の思いとの比較（中の君）

全体の形式・体裁

(1) 冒頭

『源氏物あらそひ』本文は次の文章から始まる。

おなじく心ひとつなるをわかちてあまのたくなはひくかゝりやあらん。いさゝかに歌にしてことはれる事あり。但物がたりのこと葉をゑらべるはみづからこと葉まじへざればしづのおだまきいやしといふべからず。はゞかりの関のはゞかりながら、もしほ草かきあつめぬることの伊勢のうみの見るめもはづかしくあづまやのあまりにつれづれなる夕にしるすと云。

冒頭にもかかわらず、「おなじく」という接続詞で始まることを考えれば、この文章の前に別の文章が存在して、それを受けているとも仮定できる。しかし、推定の域を出ない。

(2) 振り仮名

冒頭文章に続き、「一 きりつぼのかうゐ...」と2.1で述べた第1条が続く。第2条からは頭書に「一」の記述はない。判定の歌の部分は改行一字下げで書写されている。ところどころにふりがなが付され（第1条の例参照）単に読みを補記している場合と（第1条「御門」に対する「かど」）、訂正を意味している場合（第1条「しめし」に対する「まとひ」）とがあ

る。ふりがな部分は本文より細字である。ふりがなが応永20(1413)年の書写と同時になされたものか、あるいは後世になされたものかどうかは筆跡や墨ののり方などからは判別できない。

(3) 奥書

最後に奥書があり、書写者として「亀若丸」とある。「亀若丸」という人物は未詳である。「亀若丸」は榊原家の和泉式部続集の末にもあった¹⁾、と指摘されているが、その榊原本『和泉式部集続集』の影印⁴⁾からは識別できない。また、『日本古典文学大辞典』の『源氏物あらそひ』奥書の引用「応永廿五年」は誤記である。

3. 研究史的意義

『源氏物あらそひ』は『源氏物語』の享受史や批評史の分野で取り上げられる。『源氏物語』をその時代時代に生きた人々がどのように鑑賞し、享受していたのかを知る資料として位置付けられている。

『国語国文学研究史大成3 源氏物語上』⁵⁾の「翻刻研究文献解説」の中では、類書である『源氏人々の心くらべ』について、「『無名草子』の人物論から脱化し、源氏の主要人物を二人ずつ対偶とし、ある時・ある事に関しての心理の比較を14条の問答体で試みたもので、掌編ながら、源氏物語の鑑賞的性格描写論として出色のものである」との評価がある。

『無名草子』は、王朝女流物語の批評書として、今日最も古いもののひとつであり、『源氏物あらそひ』『源氏人々の心くらべ』はその影響下に成立したものと言われている。物語評論が現れてきたのは、「平安時代末より鎌倉時代初頭にかけて、源氏物語を始めとして王朝の諸物語が次第にひとつの過去の文学作品として鑑賞批判せられ、厳密な意味ではなお批評の語に当てはまらぬにせよ、とにかく批評の対象として考えられ」⁶⁾ようになったからである。『源氏物語』成立から一時代を経て、物語文学の裾野の広がり、読みの深化が「評論」という形で顕在化したといえよう。

重松信弘氏は、『無名草子』『源氏人々の心くらべ』などが成された時代の『源氏物語』研究について、次のように整理している。

「文芸的評論では、初期に歌論で源氏の情趣が考究せられ、無名草子で体系的な鑑賞的評論がなされた。これにつづいて、恐らくは中期と思はれる頃、源氏人々の心くらべ、伊勢源氏十二番女合、源氏四十八物たとへのこと、源氏解等の一類が出て、活潑な鑑賞的評論がなされた。これらの評論は、主として源氏中の人物や事件が表わす種々の情趣・心情などに注目したもので、平安時代的情趣に対する豊かな鑑賞をしている。そして更級日記のように、没入してしまうのではなく、知性的な省察の態度があった⁷⁾」『源氏物あらそひ』は取り上げられてこそいないが、内容や形式から見て、同様の位置付けを与えられる資料であるといえよう。

4. 来歴及び保管状況

毛利家旧蔵本

『源氏物あらそひ』は長州藩毛利家の旧蔵書であった。毛利氏は、その祖を鎌倉時代まで溯ることのできる氏である。明治に至って華族に列し、公爵を授けられた。その毛利家旧蔵書が本学図書館の架蔵となった経緯は不明である。購入によること、その時期は戦後であることは間違いなさそうだが、はっきりした購入年月日は明らかでない。『図書館勉強会資料』No.4⁸⁾によれば、元本学教授渡辺世祐氏の斡旋によるといわれる。

蔵書は歌書、歴史書などからなり、本書『源氏物あらそひ』や里村紹巴系統の連歌書など、各家の自筆や書き入れ本、写本など貴重な資料を含む。中央図書館を中心に約6900冊を所蔵している。本学では、毛利家旧蔵本として文庫形態にまとめていない。解体し、一般図書に組み込んでいく。業務用としては、『明治大学図書館所蔵毛利家旧蔵本仮目録』（1992）がある。また、毛利家作成の所蔵目録『毛利家文庫書籍目録』（5冊、コピー版）があり、毛利家独自の分類で組織化されている。例えば、『源氏物語』本体は第2冊の「国語国文」という項目に記載されている。本書『源氏物あらそひ』は、『毛利家文庫書籍目録』第3冊p.680に以下のように記されている。

連歌書

第式番 一 歌書・連歌書 目録箱中ニアリ取交ぜ（二軸欠） 拾八軸

この記載については、『源氏物あらそひ』の保管状況とからめて次に述べていく。

『源氏物あらそひ』の保管状況

『源氏物あらそひ』は、他の毛利家旧蔵本の卷子本**17軸**と共に木箱に収められている。収納箱は桐の蓋付、茶色の塗箱（**36.0 × 27.6 × 16.8cm**）で、萌黄色の紐が金具で本体部に留めつけられている。箱の蓋表に縦書き、墨で右から「歌書」「連歌書」とある。

箱の正面には**4枚**の用紙が貼付されている。

- ㊦ 公爵毛利家文庫の分類ラベル。すべての毛利家旧蔵本に貼付されている。「公爵毛利家文庫」と印刷され、「類別」「架数」「函数」「番号」「冊数」の枠が設けられている。毛利家は、**1884年（明治37）**に華族に列し、公爵を授けられたので、それ以降に体系的に整理された文庫であることがわかる。この箱には類別「歌書」、架数、函数は空白、番号「**連2**」、冊数「**18軸**」と記されている。ここで前に記した『毛利家文庫書籍目録』の記載を見てみると、類別「歌書」は「歌書・連歌書」の記載と、番号「**連2**」は「連歌書第弐番」の項に記載がある、というように一致することがわかる。
- ㊦ 赤の用紙に「六十二」。『毛利家文庫書籍目録』当該部分の欄外に六二と押印されているので、これと一致する。意味は不明である。
- ㊦ 白い用紙に「明治三十三年風入済」。曝書の意味であろう。何度か貼り変えた形跡があるので、曝書が行われる度毎に貼り直されたものと思われる。
- ㊦ 白い用紙に「ア印 百十七番」。これは、『毛利家文庫書籍目録』を見ても関連する記述はない。「公爵毛利家文庫」としての整理は、公爵を授けられた明治**37年**以降であるのは間違いないので、それ以前の分類による指示である可能性がある。

『源氏物あらそひ』は他の卷子本**17**軸と一緒に木箱に収められていることは前述の通りで、その内容目録は、箱の蓋裏に、以下の順、縦書きで墨による記述がある。

和歌條々 一軸 兼載連歌傳書 一軸 肖柏口傳拔書 一軸
出葉口傳抄 一軸 同 一軸 万句發句 一軸 月次御連
歌 二軸 聖護院御門跡沙無□連歌 一軸 尼子晴久連歌懷
紙 一軸 三好長慶連歌 一軸 宗碩發句之懷紙 一軸 梅
宗牧両吟連歌 一軸 紹巴・藤孝・昌叱三吟連歌 一軸 紹巴
發句之懷紙 一軸 連歌之切 一軸 玄仍發句之連歌 一軸
玄仲点取連歌 一軸 源氏物あらそひ 一軸 詠諸百首
一軸

以上**20**軸の目録である。

収められている卷子本の書写年代は、室町から江戸初期にまでわたる。**20**軸の目録だが、実際には上記の内、「聖護院御門跡沙無□連歌」と「尼子晴久連歌懷紙」の**2**軸が存在せず、**18**軸しかない。箱外側の「公爵毛利家文庫」のラベルにも「**18**軸」と記載されているし、**4.1**で述べた『毛利家文庫書籍目録』にも「二軸欠」と記されている。箱裏の目録が書かれた時点では、この箱には**20**軸の卷子本が収められていた。しかし、「公爵毛利家文庫」として、改めて分類整理が行われた時には**2**軸が失われ、**18**軸となっていたと考えられる。

「卷子本」という形態についても、保管状況から、別の見方が浮かんでくる。それは『源氏物あらそひ』の当初の形態は卷子本ではなかったのでは、ということである。

『源氏物あらそひ』は表紙、題箋とも新装で、加えて軸は黒のプラスチック状のものでできている。この補修はその材料から当然書写年当時からのものでなく、近年になってなされたものである。その軸装に注目してみると、同じ木箱に収納された卷子本のうち、**12**軸が『源氏物あらそひ』と同じ新装の黒色表紙と、黒のプラスチック状の軸をもつ。題箋も新装で、同一人物の筆跡によるものと見受けられる。

このことから、『源氏物あらそひ』は、他の**12**軸と共に、同時期に卷子本としての補修がなされて、新装の題箋が貼付されたと推定できる。原装

も巻物だったので、補修も巻物仕立てにした可能性と、原装は単に継紙されただけの状態か、あるいは継ぎもしていない、ばらばらの状態だった可能性も考えられる。同じ箱には、単に継紙されただけで表紙や軸をもたない卷子本もひとつ存在する。題箋の筆跡について付け加えると、蓋裏の内容目録の筆跡とも一致するようだ。

それらを総合して、『源氏物あらそひ』の伝来状況を推定すると、㊦書写（1413年）㊦他の卷子本と共に木箱に保管（内容目録書かれる・20軸）、㊦補修、㊦公爵毛利家文庫として記録（1884年以降・18軸）、㊦明治大学架蔵（1945年以降・18軸）の段階を経たことがわかる。㊦の時、既に毛利家の蔵書であったのかはわからない。㊦の時期は㊦の前であったかもしれないが、㊦の目録の筆跡と、補修時に貼付されたと思われる題箋の筆跡が同じであることから、㊦と㊦の間に長い年月は経っていないと推定する。

同一の箱に「歌書・連歌書」として保管されていることについては、『源氏物あらそひ』という『源氏物語』批評の性格を帯びる資料が、「歌書・連歌書」のひとつとして分類されてきたということに対して違和感がある。しかし、『源氏物あらそひ』の中で歌が重要な役割を占めていること、『源氏物語』が連歌の基礎的素養であったこと、他の卷子本のほとんどが連歌書であることから、毛利家では連歌書に準ずる資料として扱ったのだろうと思う。

5. 類書との比較

何を類書とするかには、分析の視点にも左右されるが、『日本古典文学大辞典』²⁾で『源氏物あらそひ』の類書として取り上げられている『源氏人々の心くらべ』を本節で比較してみたい。

『源氏人々の心くらべ』と『源氏四十八物たとへの事』

『源氏物語』の中から類似性をもつ登場人物の心境や態度を取り出し一対ずつ組み合わせ、その優劣、程度の軽重などを問答体で判定したという形式に加え、取り上げられた『源氏物語』中の人物や事跡に共通点が見出

せる。系統として、阿波国文庫蔵本⁹⁾と鈴木家蔵本¹⁰⁾の2つがある。

阿波国文庫蔵本では、『源氏こゝろくらべ』の中に、『源氏四十八ものたとへの事』『源氏人々の心くらべ』『源氏六条院御方々、忍びて通はせ給ふ人々』の三部作で所収されている。単行としては『群書類従・物語』に収められているので、早くから世に知られ、解題もある¹¹⁾。

鈴木家蔵本『源氏人々心くらべ』は、中院通村筆の写本で、伊豆の鈴木家に伝わるもの。阿波国文庫蔵本とは採用事跡、項目数、形式が異なる異本である。『源氏物あらそひ』は特にこの鈴木家蔵本との共通部分が多い。

両系統本とも成立年代、著者は未詳であるが、『無名草子』以後に後宮女房などによって作られたものであろうとされている。

『源氏物あらそひ』と異なる特徴として、両系統本とも、『源氏四十八ものたとへの事』を付していることがあげられる。『源氏物語』に関して、「男」「女」「みめかたち」「めでたきこと」など項目をたて、該当する人物や事柄を一つずつあげたもので、たとえば、「むねつづるゝ事、かしは木のふみを源氏見たまふを見つたりけん小侍従のこゝろのうち」「ほいなき事、むらさきの上の子もうけ給はぬ事」といった形である。この書も著者、成立年代は未詳である。

『源氏物あらそひ』と鈴木家蔵『源氏人々心くらべ』の比較

『源氏人々の心くらべ』には2つの系統本があるが、より共通点の多い鈴木家蔵『源氏人々心くらべ』と『源氏物あらそひ』を比較すると、次のとおりとなる。

項目数、問いの例、答えの例、判定結果、項目の異同を一覧して比較した。

❖ 項目数

『源氏物あらそひ』 = 17 条

鈴木家蔵『源氏人々心くらべ』 = 18 条

❖ 問いの例（第1条）

『源氏物あらそひ』

きりつぽのかうゐいまたとてまか^ハで給ひしをゆるしがた
□□^{くお}ぼしめしたりし御門^{かど}の秋の御こゝろと、むらさきの上

のうせたまひし源氏の御なげきと、いづれ猶ふかし

鈴木家蔵『源氏人々心くらべ』

きりつぼのかうゐいま八とてまかてたまひしほゆるしか
たくおほしまとひたりし御かとの御心と、むらさきの上
うせ給ひしけんしの御おもひにくもかくれたまひしけん
しの御こゝろといつれふかし

☞ 答えの例

『源氏物あらそひ』

つきもせぬ心のやみの深夜に雲がくれにし秋ぞかなしき

鈴木家蔵『源氏人々心くらべ』

つきもせぬこころのやみのふかきよにくもかくれにしあ
とそかなしき

☞ 判定結果

『源氏物あらそひ』 = 桐壺帝

鈴木家蔵『源氏人々心くらべ』 = 桐壺帝

☞ 項目の異同

『源氏物あらそひ』を基準として、同じ項目が第何条にあるかを示す。鈴木家蔵本の第9条は、『源氏物あらそひ』の第8条と一致するという意味である。

順番	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
源氏物あらそひ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
鈴木家蔵本	1	2	3	4	5	☞	6	7	8	9

11	12	13	14	15	16	17	18
11	12	13	14	15	16	17	
10	11	☞	☞	☞	☞	☞	☞

☞ 全体の項目数は異なる。

☞ 問いの部分は両書とも文章形式である。『源氏物あらそひ』でふりがなで訂正している部分が鈴木家蔵本の本文と一致する。

☞ 答えの部分は両者とも、歌の形式で、内容も同一である。

㊦ 同上。

㊧ 鈴木家蔵本と比較すると、**18**条のうち**11**条が『源氏物あらそひ』と一致する。若干の語句の相違はあるが、問いの文章も判定の和歌も同じ記述である。共通する**11**条は、出現順番も『源氏物あらそひ』と同様である。第**5**条と**6**条の間に『源氏物あらそひ』にはない**1**条が挿入されているだけで、第**12**条まで『源氏物あらそひ』と同じ順番で問答がある。

その他比較表に現れない相違点として、『源氏物あらそひ』は、比較の問答の前に文章がある点と、『源氏四十八ものたとへの事』を付していない点（鈴木家蔵本は後部に付す）があげられる。

このように両者には多くの共通点があり、同じ系統本ではないかと思われる。

6. 『源氏物あらそひ』の研究状況

『源氏物あらそひ』に直接言及した文献は、既刊の『源氏物語』研究書の中には見出せなかったが、『源氏物語』の梗概書研究の中で、わずかなが『源氏物あらそひ』について触れられている部分を紹介する。

稲賀啓二氏は「明応二年奥書無外題源氏抄所収「源氏ものたとへ（仮題）」解説・翻刻」¹²⁾の中で「この四十六項目は、阿波国文庫蔵『源氏こころくらべ』の中に収められる『源氏四十八ものたとへの事』及び、神宮文庫本『源氏解』と密接な関係を持つものである」として比較検討を行っている。鈴木家蔵本に含まれる『源氏四十八ものたとへの事』はこの時点ではまだ紹介されていなかったので触れられていない。

そして同氏は著書『源氏物語の研究』において、『源氏物語』の中世の梗概書研究について述べた論考の注で、「この類[『源氏小鏡』の一部の本に合載される「物たとへ」：筆者注]は「源氏物あらそひ」毛利家旧蔵、明治大学付属図書館「応永廿年奥書本」（市古貞次「資料紹介・翻刻」「中世文学」第**5**号、昭和**35**年）その他とともに問題が多いが、別の機会にゆずる。」¹³⁾と記している。

寺本直彦氏は著書『源氏物語受容史論考続編』¹⁴⁾の「桃園文庫旧蔵明応

二年奥書『源氏抄』解題」の注で、「毛利家旧蔵卷子本一巻『源氏物あらそひ』が、市古貞次氏によって翻刻され...中略...、また同卷子本の複製本も刊行され...中略...、山岸徳平氏の解説と市古氏の翻刻が付されている。この書の前半(「玉かつら心にかけてしのべども猶身にしむは秋のゆふ暮」まで)は、鈴木家本『源氏人々心くらべ』と同系統であるが、後半の内容はこれと異なっている。また鈴木家本『源氏人々心くらべ』の後半にあたる「源氏四十八ものたとへの事」は欠いている。したがって、この『源氏物あらそひ』は、当面の明応二年奥書『源氏抄』の「源氏ものたとへ」と仮題される部分とは無関係である。」としている。本書『源氏物あらそひ』は他の類書が付す『源氏四十八ものたとへの事』を欠いていることが相違点ではあるのだが、またそれゆえに『源氏物語』梗概書研究の一環である「ものたとへ」の研究からは除外されて現在に至っているように思える。

7. 翻刻、複製について

現在『源氏物あらそひ』は以下のように翻刻、複製が行われ、研究に供されている。

[翻刻]「中世文学」5 昭和35(1960)年6月 p12-13 市古貞次(翻刻) この翻刻には以下の文章が添えられる。「原本は明治大学付属図書館蔵、毛利家旧蔵の卷子本1巻である。...(中略)... 終に本書の披閲・翻印について種々の便宜を興えられた同館司書長、奥村藤嗣氏に厚く御礼申し上げます」

[複製]『復元版源氏物あらそひ』史伝研究所監修 昭和53(1978)年5月 修光社 卷子本 付:別冊12p(山岸徳平(解説)市古貞次(翻刻)) 21000円

底本が本学所蔵本であるにもかかわらず、本学では複製本を所蔵していない。日本女子大学所蔵本は、原本と同様卷子本の形をとっている。木製の箱入りで、別冊で解説と翻刻が載せられている。翻刻は「中世文学」5と同様で、末尾に添えられた文章も同じだが、“明治大学付属図書館蔵”

と“同館司書長”の部分が削除されている。ゆえに明治大学図書館所蔵本の複製であるかどうかは不明瞭である。

8. おわりに

昭和**35（1960）**年に翻刻が「中世文学」に掲載されたことで、『国書総目録』刊行にさきがけて世に紹介された資料ではあるが、『源氏物語』との関連では、まだ専門の研究者によって十分に検討されたとはいえない。今回の紹介で『源氏物あらそひ』の研究や利用が広がって、新たな成果が得られれば幸いである。

付記：山口県文書館「毛利家文庫」は長州藩の藩政文書を所蔵し、解説目録が**5**分冊まで発行されている（『毛利家文庫目録』¹⁵⁾）。本学でもその転写本を多数所蔵しており、長く図書館で未整理のまま保存してきたが、**1998**年度に刑事博物館に移管された。

参考文献

- [1] 『復元版源氏物あらそひ』史伝研究所監修 修光社 1978.5 付：別冊12 p（山岸徳平・解説 市古貞次・翻刻）
- [2] 『日本古典文学大辞典』岩波書店 1983.10-1985.2 第2巻 p.406 今村祐一郎執筆「源氏物あらそひ」
- [3] 翻刻 市古貞次執筆「中世文学」5 中世文学界 1960.6 p12-13
- [4] 『日本古典文学影印叢刊9 榊原本私家集1』貴重本刊行会 1978
- [5] 『国語国文学研究史大成3 源氏物語上』三省堂 1960
- [6] 『無名草子詳解』富倉徳次郎著 有精堂出版 1954.9
- [7] 『増補新攷源氏物語研究史』重松信弘著 風間書房 1980.10
- [8] 『図書館勉強会資料 No.4 明治大学図書館分析資料その1』（図書館勉強会ニュース・レタ-別冊）明治大学図書館勉強会 1973.3

- [9] 翻刻『群書類従17』・『新校群書類従14』・『無名草子』(岩波文庫 富倉徳次郎 1943)・『無名草子詳解』(富倉徳次郎 有精堂 1954)・『増補国語国文学研究史大成3』(三省堂 1977)・『増補新攷源氏物語研究史』(重松信弘 風間書房 1980.10)
- [10] 翻刻 森川昭執筆「成蹊国文」7 成蹊大学文学部日本文学科研究室 1974.9
- [11] 解題『増補新攷源氏物語研究史』重松信弘著 風間書房 1980.10・『群書解題12』続群書類従完成会 1961.2
- [12] 明応二年奥書無外題源氏抄所収「源氏ものたとへ(仮題)」解説・翻刻 稲賀敬二執筆「国文学攷」33 広島大学国語国文学会 1964.3 p.35-39
- [13] 『源氏物語の研究：成立と伝流』稲賀敬二著 笠間書院 1967.9 p.280-281
- [14] 『源氏物語受容史論考続編』寺本直彦著 風間書房 1984.1
- [15] 『毛利家文庫目録1-5』(山口県文書館史料目録1-5)山口県文書館 1963-1978

その他参考文献

[目録]

- è 『国書総目録』 岩波書店 1963.11-1976.12
- è 『国書総目録』補訂版 岩波書店 1989.9-1991.1
- è 『古典籍総合目録—国書総目録続編』 岩波書店 1990.2
- è 『国文学複製翻刻書目総覧』 日本古典文学会、貴重本刊行会 1982.12
- è 『続国文学複製翻刻書目総覧』 貴重本刊行会 1989.7
- è 『古典文学全集・翻刻書・研究書総目録』 日外アソシエーツ 1996.7
- è 『日本書籍総目録1979 書名編』 日本書籍出版協会 1979.6

[書誌学]

- è 『書誌学序説』 山岸徳平著 岩波書店 1977.12
- è 『慶應義塾大学附属研究所斯道文庫貴重書蒐選図録解題』 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 1997.2

è 『中京大学図書館蔵国書善本解題』 中京大学図書館編 新典社 1995.4

è 『日本古典書誌学総説』 藤井隆著 和泉書院 1991.4

è 『日本の古典籍：その面白さその尊さ』 反町茂雄著 八木書店 1984.4

[源氏物語]

è 『源氏物語 1-6』(新編日本古典文学全集 20-25) 紫式部著 阿部秋生[ほか]
校注・訳 小学館 1994.3-1998.4

è 「古注釈書の翻刻・影印一覧」「国文学 解釈と鑑賞」48(10) 特集＝源氏
物語-研究史と享受史) 至文堂 1983.7

è 「梗概書の概観」稲賀敬二執筆「国文学 解釈と教材の研究」14(1) 学燈
社 1969.1

è 『源氏物語必携』 秋山虔編 学燈社 1978